リニューアルオープン記念展

学習院コレクション　華族文化　美の玉手箱

― 芸術と文化のパトロネージュ

ローブ・モンタント
平成時代　上皇后陛下より学習院へ下賜

展示期間：3月14日～3月22日

明治維新後の激動の中で、一番大きな変化があったのは、実は皇室かもしれない。それまで京都御所の御簾の内で、和装で、限られた人々とのみ謁見していた天皇は、東京へ移り、西欧諸外国の賓客接遇のために明治5(1872)年に洋装礼服を取り入れた。

一方、皇后の洋装化には時が必要だった。大日本帝国憲法発布が間近に迫った明治19年、伊藤博文首相・皇后宮大夫香川敬三などより洋装化を勧められた皇后は「国のためであれば何でもする」と並々ならぬ決意を表した。遂に同年7月30日、皇后は華族女学校の卒業式に初めてドレスを着用し臨席、日本女性の近代化の幕が開けた。

翌年の新年拝賀儀式からは、皇后はじめ皇族妃は洋装大礼服で臨むこととなった。この直後に皇后は「洋装は日本古来の「衣」と「裳」と同じであるから、洋装は理にかなっている。ただし、服を作る際には国産の生地と技術を用いること」という内容の「思召書」を発した。ドレス製作であっても、国産の生地を使用し、織や刺繍などは日本の伝統技法を用いることを推奨し、日本の伝統工芸技術や職人を守ろうとした。

この皇后の思召は現在の皇室にも受け継がれている。上皇后陛下はお会いになる相手やシーンに応じてお召し物を選ばれると共に、日本の伝統技術をいかすことに心を配られるという。このローブ・モンタントは絹地に葉や花びらの形に切り抜いた佐賀錦を留め付け、その縁取りや茎部分を金糸、銀糸を用いて日本刺繍の技法である駒縫いで表している。

明治の皇后の並々ならぬ決意が日本皇室の伝統となっているのである。

（学芸員　長佐古美奈子）

色絵金彩鳳凰文煎茶碗皿　幹山伝七
明治5(1872)～20(1887)年　有栖川宮家より男爵西紳六郎へ下賜　西家旧蔵

気品漂う鳳凰を金彩で描写し、細部に赤、青、緑を効果的に配した12客揃いの煎茶用碗皿。主文様の鳳凰の周囲の雲や草花、碗の口縁の輪宝文、皿の見込みの蓮弁文など、模様のほとんどを金彩で表現した豪華な逸品である。箱裏に「明治二拾年三月御拝領　桃印」とあり、その後有栖川宮威仁親王妃慰子が男爵西紳六郎へ下賜したのだという。

作者の幹山伝七(1821～1890)は瀬戸焼の陶工の家に生まれ、彦根藩の湖東焼に従事したのち、幕末に京都へ移住して磁器の製作を始めた。輸出陶磁器の製作が全国規模で盛んとなった頃、幹山は西洋顔料による華やかな色絵磁器で人気を博し、京都の陶工の中で頭角を現していく。明治5(1872)年の京都博覧会では、幹山製品は明治天皇のお買い上げとなり、その後宮内省から注文を得るようになった。とりわけ有栖川宮家への納品数は多く、現在三の丸尚蔵館収蔵の約600点に及ぶ和食器「色絵四季草花図食器」はよく知られる作品群である。

展示期間：通期

幹山は明治天皇の御用品に「幹山欽製」銘を記すことを許されたとされ、本作にも器の底裏に「幹山欽製」の染付銘がある。本作が天皇家の御用品なのかは今後の課題となるが、金彩をふんだんに用いた精緻な表現はその可能性を示唆するものである。天皇家から有栖川宮へ、のちに有栖川宮家から西家へ下賜されたものだったのかもしれない。

（EF共同研究員　森谷美保）

刺繍鶴亀松竹梅文筥迫
明治～大正期 山階宮家旧蔵

筥迫は江戸時代の武家女性が盛装の際に用いる懐中装身具。中には紙や懐中鏡、紅筆などを入れ、着物の胸元に挟み込んだ。表面に施された絢爛豪華な装飾は所有者の地位も示したという。本品は最後の薩摩藩主で後の公爵島津忠義の4女、山階宮菊麿王妃常子の所用品である。常子は香淳皇后の母である久邇宮邦彦王妃俔子の姉にあたる。筥迫の表面には金糸・色糸を取り交ぜた日本刺繍で鶴亀松竹梅文をあらわす。とじ帯には梅花蕾を刺繍した香袋がついている。

（学芸員　長佐古美奈子）

展示期間：4月15日～5月1日

ビーズバッグ
大正～昭和戦前期　侯爵山階家旧蔵

展示期間：通期

大正14(1925)年に侯爵山階芳麿と結婚した寿賀子夫人所用とされるビーズ製バッグ。愛らしい印象のピンク地のバッグは、開口部に象牙が用いられ、瀟洒なデザインがひときわ目を引く。鼈甲製の開口部を持つもう一方は、赤、青、黒、黄色のビーズによる華やかな幾何学文様が印象的である。

山階侯爵夫妻が結婚した1920年代、欧米ではアール・ヌーヴォーに変わる新たな美術・装飾様式「アール・デコ」が流行した時代だった。アール・デコはドレスや装身具といったファッションの分野で人気を博し、日本の華族夫人の装いにも取り入れられて、本作のようなバッグなどが作られたのである。

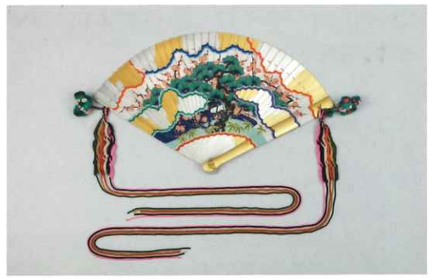
（EF共同研究員　森谷美保）

金銀瑞雲流水松竹梅文檜扇
大正14年(1925)　侯爵山階家旧蔵

檜の柾目の板を薄く剝ぎ、糸でつがって要を蝶と鳥をあしらった金具で留めた檜扇。元来は木簡を綴じ重ねたもので、備忘や、涼を招くために用いられた。後に、紙を貼った紙扇が流布すると、板製の檜扇は儀式用の具として形式化し、板の枚数や長さ、表面に描かれる絵、両端の親骨に付けられる飾りなどに様々な規定が生じた。檜扇は天皇以下、男女ともに用いられてきたが、特に女房が用いる濃彩で泥絵の檜扇は、顔貌を覆い隠す目的にも用いられたことから板数が増加し大型化して、大翳とも呼ばれた。近代以降、皇后はじめ女性が公的な儀式に出席が求められる中で、容貌を覆う目的での檜扇の用途は廃され、五衣唐衣裳や袿袴などの女房装束を着用する際に、閉じた檜扇に飾り紐を整えて巻き、胸の前で扇の頭を右高に両手で持つ様式となった。

この檜扇は表は金銀の霞に松竹梅の吉祥文。裏には蝶鳥の有職文様を配した美麗な檜扇である。親骨に松・梅の糸花を付けた山科流の仕立てで、六色の蜷結びを施した飾り糸を添える。侯爵山階芳麿夫人寿賀子が袿袴を用いた際の料である。

（EF共同研究員　田中潤）



展示期間：4月15日～5月1日